

令和7（2025）年度
物流・ロジスティクス専攻学生
奨学金事業終了報告書

1. はじめに

公益財団法人鎌田記念財団は、物流・ロジスティクス分野を学ぶ四年制大学生及び大学院生を対象に、経済的支援を通じて将来社会に貢献する人材の育成を目的として、「物流・ロジスティクス奨学金事業」を実施している。

物流・ロジスティクスは、人々の生活や企業活動を支える重要な社会基盤であり、輸送・保管のみならず、サプライチェーンマネジメント、国際物流、流通、データ活用、AI技術の導入、地域産業との連携など、幅広い分野と密接に関わっている。社会や産業構造が大きく変化する中で、こうした分野を支える専門性を持つ人材の育成は、ますます重要性を増している。

令和7（2025）年度は、物流・ロジスティクスに関連する多様な分野で学ぶ27名の奨学生を採用した。流通情報、経営学、経済学、工学、情報科学、水産分野、海洋政策、国際分野など、それぞれ異なる専門領域において学ぶ学生が本事業に採択されており、物流・ロジスティクスという分野の広がり和社会的重要性をあらためて示す結果となった。

本報告書は、奨学生から提出された終了報告書の内容をもとに、本奨学金の活用状況、今後の進路に向けた取組、本奨学金を受給しての感想、奨学生としての自覚や今後への抱負について取りまとめたものである。

2. 奨学金の使途

奨学生からの報告によれば、本奨学金は、学費、生活費、教材費、通学交通費など、学生生活の基盤を支える費用として幅広く活用されていた。

特に学費や生活費への充当は多く、大学生生活を継続するうえでの経済的負担の軽減に大きく寄与していることが確認された。また、教材費や参考書購入費、通学定期代、通信費、学食費など、日常的な学修環境を整えるための支出にも活用されていた。

加えて、資格試験の受験料や対策講座費用、税理士試験に向けた予備校費用、就職活動に伴う交通費や関連費用など、将来の進路形成に向けた自己投資として活用した奨学生も見られた。大学院進学を予定する学生からは、受験に伴う交通費や宿泊費等への活用も報告されている。

大学院生においては、研究活動に必要な書籍購入費、調査費、学会参加費や研究発表に伴う費用等に活用された事例もあり、本奨学金が専門性の高い研究活動の継続を支える役割も果たしていることがうかがえた。

このように、本奨学金は、学生生活を支える基礎的な費用から、専門性を高めるための学修・研究活動、さらには将来の進路形成に向けた挑戦まで、多様な用途に活用されていた。

3. 進路で積極的に取り組むこと

奨学生からは、今後の進路に向けて具体的な目標を持ち、それぞれの専門性をさらに高めようとする意欲的な姿勢が多く示された。

物流・ロジスティクス分野そのものに関わる進路としては、物流戦略、サプライチェーンマネジメント、需要予測、在庫管理、物流ネットワークの最適化、物流拠点の効率化など、企業活動や社会インフラを支える実務的な領域への関心が多く見られた。また、AI、データサイエンス、情報技術等を活用し、物流業務の高度化や効率化に貢献したいという目標を持つ奨学生も確認された。

国際物流やグローバルなサプライチェーンに関心を持つ奨学生からは、語学力の向上、海外での学修、国際経済や海外の物流政策に関する学びなど、より広い視野から物流・ロジスティクス分野を捉えようとする姿勢が見られた。

また、大学院進学を通じて研究を深化させたいという学生や、研究活動の継続、学会発表、研究成果の社会還元を目指す大学院生もいた。物流・ロジスティクスそのものに限らず、水産流通、海洋政策、製品開発、経営分析、会計学など、自身の専門領域から物流との接点を見出しながら学びを深めようとする姿勢も特徴的であった。

さらに、資格取得、教職、税理士試験への挑戦、インターンシップ参加、就職活動への積極的な取組など、それぞれの進路に向けた具体的な行動目標も多く挙げられていた。

4. 当奨学金を受給しての感想

奨学生からは、本奨学金の受給に対する感謝の声が数多く寄せられた。

最も多く見られたのは、経済的な不安が軽減されたことで、安心して学業や研究に集中できるようになったという声である。学費や生活費等の負担が軽減されたことで、精神的な余裕が生まれ学業への集中力が高まったとする記載が多く見受けられた。

また、アルバイトに充てていた時間を減らし、その分を授業、研究、資格取得、就職活動、課外活動など、自身の成長につながる活動に充てることができたとの報告も多かった。

家族の経済的負担が軽減されたことへの感謝を述べる奨学生もおり、本人だけでなく家庭全体にとっても大きな支えとなっていたことがうかがえる。

大学院生からは、学会参加や研究費の確保により研究活動を継続できたことへの感謝が示されており、研究の継続そのものを支える支援として機能していたことも確認された。

さらに、「これまで諦めていたことに挑戦できた」「より前向きな気持ちで学生生活を送ることができた」「支援を受けたことで自分の進むべき方向がより明確になった」といった声もあり、本奨学金が単なる経済的支援にとどまらず、奨学生の意欲や挑戦を後押しする存在となっていたことがうかがえた。

5. 奨学生としての自覚と今後への抱負

自由記述欄では、奨学生としての責任感や、将来社会へ貢献したいという強い思いが多く記載されていた。

「支援を受けている立場であることを自覚し、期待に応えられるよう努力したい」「将来は自分も誰かを支える側になりたい」「学びや経験を社会に還元したい」といった記載が多く見られ、本奨学金を単なる給付として受け止めるのではなく、自らの成長と社会貢献への契機として捉えている様子がうかがえた。

また、物流・ロジスティクス分野に特化した奨学金の存在に意義を感じたという声や、文系・社会科学系の学生にも門戸が開かれていることへの感謝を述べる声も見られた。

一部の奨学生からは、奨学生同士の交流や現場見学、意見交換の機会があればより学びが深まるのではないかという提案も寄せられており、本事業を通じて奨学生同士の交流や成長の機会を期待する姿勢も見受けられた。

物流・ロジスティクスは社会を支える重要な基盤であり、その分野に関わる者として責任を持って学び続けたいという意識も多く見られた。奨学生それぞれが、自身の専門性を高めながら将来の社会貢献との接点を意識し、将来への抱負を明確に持っていることが確認された。

6. 総括

令和7（2025）年度の物流・ロジスティクス奨学金事業を通じて、当財団は、物流・ロジスティクス分野の発展を担う学生に対し、経済的支援を行うことができた。

奨学生27名は、それぞれ異なる専門分野において学びを深めながら、自身の進路に向けて主体的に取り組んでいた。物流・ロジスティクス分野は、流通、経営、経済、情

報、工学、水産、海洋政策、国際分野など、多様な学問領域と結びついており、本事業を通じてその広がりと可能性を改めて確認することができた。

本奨学金は、学費や生活費といった基礎的な支援にとどまらず、資格取得、研究活動、学会参加、就職活動、進学準備など、奨学生の将来への挑戦を支える重要な役割を果たしていた。

また、終了報告書からは、奨学生が支援への感謝とともに、自身の学びを将来社会へ還元したいという強い意志を持っていることが確認された。

当財団は、今後も志を持って学ぶ学生への支援を継続し、物流・ロジスティクス分野の発展を担う人材の育成を通じて、社会に貢献する公益目的の取り組みを推進していく。

以上